

紹介

大阪府教育百年史

第二巻史料編 (1)

大阪府は、近代工業の著しい発展を示しながら、府単位で自らの歴史を顧みることの少いところである。そのなかでようやく自治体として歴史の関心を高めてきているが、その着実な成果として、近代教育史についての本書を得たことは、大きな意義をもっている。

本書は、現大阪府を構成する旧大阪府(摂津)と旧堺県(河内・和泉)の二府県にわたって、近代教育の成立の過程を中心に、寺子屋から明治十四年までの史料約一三〇〇点を収録したものである。学制頒布後のいわゆる自由主義教育の時期において、大阪府でどのように教育が整備されて行ったか克明に示されている。

紹介
編集の方法は、各史料を、近代教育・学制実施以後の初等教育・女紅場等から社会教育にいたる十一の項目に分類し、項目ごとに編年体と並べている。女紅場に示され

る女子教育、大阪市中の幼稚園、特色ある高等教育をはじめ、教育内容や教員の履歴・構成など興味深い内容が豊富にもりこまれている。

このような史料の収集・選択には並々ならぬ努力のあとがうかがえる。比較的簡単に目に触れることができるものの後の時点での編集である学校沿革誌などを排して、たとえ断簡であってもその時点での直接的な史料を丹念に拾いあげているのは、その例証といえるだろう。「日本教育史資料」の寺子屋調査が、実は各村からの報告にもとづくものであったことが、河内国岩室村・小吹村の例で示されている。これなどほんの一例で、その他詳細な史料を通して、府下の教育史の研究水準が、中央統計的な「文部省年報」をこえて新しい段階に入ったことを、本書は雄弁に物語っている。

学制実施が各地方にどのように具体的に展開したかは、とりわけ関心のもたれるところであろう。その点については、大阪府権知事渡辺昇の「学校設立の告諭」、学制解説や堺県の「学問の心得」、堺県知事税所篤の一般行政と教育政策のかかわり、河内の戸長端山周平の「事情解説」などによ

って旧二府県での近代教育の特徴を知ることがも可能であろう。史料的には数少いが下々等小学や旧大阪府に多かった私立小学などは地域的な特徴を示したものとさえよう。また、教育制度の整備と民衆とのかかわりも重要な面である。不就学についての和泉国南面利村・善正村・畑村、河内国四条村などの調査は、国民教育が貧困によって阻外されるといって近代社会のかかえるアボリアを考える重要な史料であろう。戸長が郷学校へ入るためその役を辞する例も、文明開化期の啓蒙的な教育の普及を能動的にうけ入れる民衆の姿をよく示している。

近代史の編集にさいしては、官庁所蔵文書の役割が大きいが、大阪府では終戦時にその貴重な保存書類をすべて焼却したという。そのため本書の編集も他の自治体では味えないほどの苦勞を必要としたと推察される。このハンディキャップをうめるべく、旧大阪府については、学校その他公的機関を、堺県については戸長役場文書を求めて府下の旧家を精力的に博搜されている。

史料の調査・収集・編集には教育百年史編集室の沢井・福島雅藏・中川啓史の各氏があたられた。いずれも前近代史の研究者

として知られる歴史家であるが、近代教育史に新たな意欲をもって立向われた。その成果が、手堅い実証にもとづく厳密な史料操作となつてあらわれ、本書の価値をいっそう高いものにしてゐる。

大阪府教育百年史は全三巻の予定とどき、本文(叙述)篇と史料篇(2)の完成を期待して紹介にかえる次第である。

(A5判 一二六六頁 写真八頁 目次四七頁 昭和四十六年三月 大阪府教育委員会)
(酒井 一・龍谷大学助教授)

G・バラクラフ著

中村英勝・中村妙子訳

現代史序説

現代について断片的に語ることはたやすい。だが現代史に総合的な見取図を与えることは難しい。世界史が新たな段階を迎えたことは誰の目にも明らかである今日、その野心的な試みたる本書の邦訳はまことに時宜を得ている。慧眼のオックスフォード中史家の手になる原著は、一九六四年の執筆であり、以後七年間世界の激動は凡

庸の現代史分析の焦点を曇らせるに足るものがある。にもかかわらず本書における分析は今日なお基本的には光を失つておらず、むしろ執筆当時より一層の説得力を持ちうるようにさえ思われる。しかも本訳書に特に寄せられた長い序文(七一年四月付)は、この間のギャップを十二分に埋め、訳書の光彩を原著以上に高めている。著者の現代史に対する認識視座の特色は何よりもそのグローバルな視角にある。一九世紀ヨーロッパの国民国家を単位とした勢力均衡の時代から地球規模での真の世界史への座標転換、国際政治、人口エネルギー両面における西欧の比重低下とA・A諸国の抬頭、米中ソを中心としたブロック化と大陸規模での世界的再調整期の開幕という認識は西欧人としての制約を見事に脱している。著者は従来のヨーロッパ中心の世界史像に根本的な修正を迫り、同時に一九世紀以来、今尚根強く残る悪しき歴史主義に対する方法論的挑戦をも意図している。歴史における継続面より断絶面に目をむけ、現在と未来への展望から過去を把え返し、現代史に単なる政治評論を超えた学的認識を獲得せしめようとすると試みは「現代」をルネッサ

ンス以降一九世紀末葉までのいわゆる「近代」とまったく世界構造を異にする新しい史的時Ⅱ空であると規定する。彼はこの構造転換をもたらした原動力を一九世紀末葉以降の第二次産業革命(科学技術革命)にもとめ、その生み出した高度工業社会の帝国主義的世界制覇の進行とその解体過程という一円環の中に世界構造の一大過渡期を見る。つまり一八九〇年の前後から一九六〇年あたりまでを近代と現代の間に横たわる分水嶺と見、ドル時代の終焉以後の世界を新たな時代、政治的多極化と南北問題(著者はこの用語を用いてはいない)の時代であると把握する。この構図は大局的な文明史観としては誤っていない。ただ難を言えば、この七〇年もの大きな分水嶺に生起した諸々の歴史事象の意味が全て国際政治論に還元され、キメの細かい段階規定が欠落していることは否めない。第二次産業革命は進行中の第三次産業革命との構造的連関を問われるべきだし、帝国主義と南北問題も産業資本主義↓独占資本主義↓国家独占資本主義と社会主義との競合という経済学的段階分析を踏まえねばなるまい。またマルクス主義理解の不十分さは一九一七